

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【十三】

後堂 門原 信典

三教老人の序② 不立文字一考
皆さんもご存知ですが、由紀さおりさんという歌手の方がいらつしやいます。

その由紀さおりさんの特集が数年前NHKで放映されました。その当時出された由紀さんのCDアルバムがアメリカ、カナダ、イギリスなどでヒットチャートの一位になり、その秘密を解く、というような番組でした。

特に由紀さんは英語ではなく、ほとんど日本語で歌われていたのに、何故ヒットするのか。日本語の分らない外国の人達には、とても美しい音に聞こえた。それは何故か？

そして一番不思議な事は、多くの人たちが、由紀さんの声から、川のせせらぎや、夏のそよ

風、美しい山や自然の情景を思い浮かべた事です。

「ことばの意味はわかりませんが、でもすごく楽しみです。心に自然や海が浮ぶのです」と言われる方もありました。

どういふことでしょうか。その時私は「不立文字」とは、この事かと思いました。

由紀さんの声にも特徴がありました。

由紀さんの声を調べた方が、その声の中に、フォルマントと云う音の響きをあらわす周波数の帯を沢山発見されました。普通の人は四本ぐらいしかないのですが、由紀さんはそのフォルマントが八本もあるのです。

という事は、多くの周囲の音、多くの人の耳だけでなく身体と心に共鳴するという事でした。

そして、由紀さんは言葉を大切にされ、童謡を歌い続ける中で日本語と真摯に向かい合つてこられたそうです。

同時に、何よりも自然の情景を一つ一つ思い浮かべながら歌われていたのです。

何故日本語の分らない人達が由紀さんの歌を聞いて自然の情景を思い浮かべるのか。アメリカの詩人の方が解説されています。

その人は「日本から来た多くの歌手はアメリカ人を見て、アメリカ人に対して、アメリカ人に気に入られようと歌う。由紀さんはアメリカ人を見ずに、歌の向こうに在るもの、つまり自然の情景を思い浮かべながら歌っているから」と解説していました。では誰でも自然の情景を思い浮かべながら歌うと、言葉がわからなくても、聞く人に自然の情景が伝わるのか。

私がみ佛様を想念してお唱えすると聞かれた人には、み佛様の姿が浮かぶのか？

何故そうなるのか私は一生懸命聞きましたが、私にそれを理解できるだけの知識も想像力も無かったので、さっぱりわかりませんでした。

しかし、そのフォルマント、

共鳴という言葉聞いた時に、私は目からうろこでした。普段から声は大きい方でしたので、それが自慢で誰よりも大きな声で、透る声を目指していましたが、それは佛道修行では無かったのです。全てに共鳴するように声を出す事が大切だったのです。

私が住職させていたでいているお寺には約二百貫(七五〇kg)の大梵鐘があります。「鐘の音は、み佛様の声」ですから鐘の音は一声二声と数えます。「み佛様を突き出すように鐘を鳴らしなさい」と教えていただきました。

正法眼蔵辯道話に「空をうちてひびきをなすこと撞の前後に妙声綿綿たるものなり」とあります。鐘を撞く前から後もみ佛様の声に包まれているのです。その妙声が聞こえなければいけません。

そのみ佛様の声に、大自然に私の声を共鳴させる。鐘の音に「アー」と私の声を重ねて発声するように稽古しました。

平安時代中期に「南無阿弥陀佛」を唱えて人々に念佛を広めた京都の六波羅蜜寺の開祖である空也上人の像があります。首から鉦を下げ、鉦を叩

くための撞木と鹿の角のついた杖を持ち、草鞋履きで歩かれています。六体の阿弥陀佛の小像を針金で繋ぎ、開いた口元から吐き出すように取り付けられ、空也上人が「南無阿弥陀佛」を唱えると、その一音一音(南・無・阿・弥・陀・佛)が阿弥陀佛になったという伝説をもとに彫刻化されています。

その空也上人のように、私の声のみ佛様の声になるでしょうか。

由紀さんの歌を聞いた人が、自然の情景を思い浮かべるのは、由紀さんが歌として表現する風景とそこから生まれる心情を純粹に見つめているから。歌の向こうにあるものではなく、歌以前の真実を由紀さん自身がしっかりと見つめて、ただかれ、共鳴されているからこそ、その歌声と共に奥行きも深みもあり、多くの人の心に響くのです。

「小さい秋」という歌を歌われる時にこういうことを言われました「小さい秋という事は季節の移ろい。夏から秋に行く時のささやかな変化。虫の音がある日、突然夕方になると聞こえる。夜は少し肌寒くなってきたからセーターでも着ようか。八百屋さんに行く」と栗や柿の秋の味覚が出てい

たり、銀杏やモミジが少しずつ色づいていたり。そういう事にフト気づく事が小さい秋だと思っている。それを自分の言葉の響きの中で、日本人の歌い手として母国語（日本語）を歌うという私の歌」

今、A1に危惧されている方の声をよく聞きますが、果たしてA1の歌声で自然の情景が浮かぶのか？

もとより門外漢ですが、A-1に「これから何も考えるな、答えを出すな」と指示するとどう答えるでしょうか？

「どうぞ電源を切ってください」と答えたら面白い。

私たちは修行道場にあつて、みんなの声が一つに成るようにお経を読むのですが、自分勝手な声ではなく、みんなに共鳴するようにお経を唱えます。この道場のお経がそのまま、檀家の皆さんの心に響き、共鳴するようにお勧めする。何よりも自分のお経が、自分自身に共鳴するようにお唱えしなければいけません。

坐禅もみ佛様に包まれてみ佛様と共鳴した姿です。

参究すればするほど広がり深まります。「不立文字」ですから答えはありません。(続く)

テレホン法話 (〇八九七 四一・〇〇三三)
禪のたより



一期一会

午前6時に大梵鐘を鳴らし、その後、朝のおつとめをするのが日課になっています。昔は師匠である父が毎日やつておりましたが、その父も昨年夏に八十五歳で遷化したしました。

父が最期を過ごしたのは
ショートステイ先の施設でし
た。食が大変細くなり点滴の
必要が出たため、介護タクシ
ーを頼んで二日おきにかかり
つけの病院へ一緒に行き、施
設へと連れ帰る。そんな生活
を一週間ほど続けました。

その日は金曜日、土日は病院が休診ということもあり、三日後の月曜日にまた迎えに来るけんね」と父に話し、父の乗った車いすをスタッフさんに引き渡し、いつものように父がエレベーターの扉の向こうに見えなくなるまで見送っておりました。スタッフさんは仕事が忙しかったのか、いつもなら私が立っている玄関が見えるように方向転換をしてエレベーターに入ってい

くの、その日に限つて方向転換をすることもなくそのまゝエレベーターに乗り込み、父の後ろ姿が扉の向こうに消えていきました。何とも寂しい気持ちになりながらも『また三日後に会えるから』と自分に言い聞かせ帰路につきました。その二日後、父は旅立ちました。

病院の救急治療室で冷たくなつた父に会い、あの日お互い顔を見ながら送つてあげられなかつたことの後悔と悲しさが一気に胸に押し寄せてきました。会うたびに力が衰え行く父を見ながら、いつ別れが来てもおかしくないと、ほんのわずかな時間も無駄にはしないようにと大切に生きてきたのに、あの日、顔を合わせで見送ることが出来なかつた。そのことが、ただただ悔やまれて仕方ないのです。

禪語に『一期一会』という言葉
葉があります。これは『その人
と出会うこの瞬間は、一生に
たった一度きりの、二度と戻

ることのない大切な時間なのですよ』という教えます。

私は父の最期に接し、掛けた替えのない大切な時間を共に過ごしてまいりました。食事やお風呂、トイレや移動といった介護の数々。その当時はしんどいと思うこともありましたが、振り返ってみますと、どれもが尊く有り難い時間でした。しかし、『また三日後に会えるから』と自分に言い聞かせながらも、父の背中しか見ることが出来なかったあの瞬間。あの日あの時あの場所に戻って父の顔を見たいと思っても、それは叶わぬことです。「ああ、この世は本当に無常なのだな」と思い、「必ず次があると思つてはいけない。今」というこの瞬間は、二度とは戻らない大切な時間なのだ」と再認識させられた父との別れでした。

家族と過ごす、友と過ごす、職場の同僚と過ごす、そんないつもと変わらない日常の時間。隣にいて過ごせることもあるでしょうし、遠方において電話越し、メール越し、手紙越しで、お互いの思いを共有しながら過ごすこともあるかと思えます。距離がどれだけあろうとなかろうと、相手を

許す心
思いやる心

大切に思いやりながら過ごした時間は、お互いの心と心が触れ合える、とても尊くかけがえない大切な時間です。

私たちの目の前に広がっている世界は、すべてが一期一会の時間の連続でできています。そのことに気づき、目の前のその時間を大切に過ごしていけるよう、共に心がけてまいりましょう。

愛媛県宗安寺 能仁洋一師
令和五年七月十一日～二十日

いつもニコニコと和やかなお顔と柔らかなトーンでお話しくださる方がいらつしやいます。ここでは佐藤さんといたましましょうか。ご一緒にお話しをしていると、私の心もとても穏やかにしていただける佐藤さん。

ある日、そんな佐藤さんからお話いただいた内容に、私は大変な衝撃を受けることになりました。それは数十年も前に、佐藤さんご自身の子供さんが大変な事件に巻き込まれ、そのことで佐藤さんは長年に亘り苦しんでこられた、そういつたお話でした。

ある事件に巻き込まれた佐藤さんの子供さんは、なんと犯人の手にかかり命を落とされてしまったそうです。大切にしていた我が子を手にかけた犯人は、すぐに逮捕されましたが、その犯人に対する佐藤さんの怒り憎しみは相当なもので、「殺してやりたい!」と思うほどだったそうです。

そして、その思いは、いつまでたっても消えることなく月日が流れ、ふと気付くと身も心もボロボロになっている自分がそこにあったそうです。

佐藤さんが臨んだ、ある日の裁判でのことでした。出廷してきた犯人の横顔はゲッソリとやつれており、今おかれている状況に大変苦しんでいるように感じられたそうです。その時佐藤さんは、「今まで犯人のことが、どうしようもなく憎くて憎くて、なぜこんな苦しみを味合わされないといけないのかと恨みの中で生きてきた。けれども、ああ、この人も、自分自身が犯してしまった罪によって、長年に亘って苦しんできたんだな。そんな思いがよぎった時、ふと心の中で「もう、許そう」そう思ったのだそうです。

佐藤さんは犯人に対して「あ

なたは、私達の最愛の我が子を手にかけるという、到底許すことなどできない罪を犯した。しかし今、あなたの姿を見たときに、あなたはあなたなりに自分が犯してしまった罪の重さにずっと苦しんできたことが感じ取れた。そう感じた時に、きっと我が子も、私達がいつまでも怒りや憎しみだけの人生を送り続けることを臨んではいけないだろうと思った。犯した罪は重いけれども、私はあなたを許します。これから、身体をいたわりながら、罪を償っていつて欲しい」そう言われたそうです。

それを聞いた犯人は、大粒の涙を流しながら佐藤さんに対して頭を下げたということでした。

佐藤さんは話されます。「そのときまで私は、犯人に対する怒りで我を忘れていたのだと思う。今思えば、犯人を恨んだり憎んだりするのは精神的にも肉体的にも本当に苦しかった。犯人を許そうと思った時に、その苦しみから解放されて、怒りと憎しみと共に、あの事件で時間が止まっていた自分自身の心が、やっと前を向いて歩きだせた。罪を犯したその犯人を許すことで、犯人の心も、そして自

分自身の心も救われたように思える」と。

大本山總持寺御開山瑩山禅師さまは『たとい難値難遇の事有るも、必ず和合和睦の思いを生ずべし』と御示しになられ、人々の悲しみも苦悩も我が事のように受け止め相和して生きる『同事』の教えをお説きになられました。

佐藤さんは自分自身大変な苦悩の中にありながらも、恨み憎んでいた犯人の苦悩を感じとり、犯人の体をいたわる慈悲の心向けられました。佐藤さんのとられた行動は、まさに瑩山禅師様の『同事』の教えそのものだったように感じます。その慈悲の心は、今まで佐藤さんの心の内にありながらも恨み憎しみが邪魔をして見えなくなっていた『子供さんが佐藤さんの幸せを願う心』を照らし出し、犯人も佐藤さん自身も、そしてきつと子供さんの心をも救ったのではないのでしょうか。

それから数十年。佐藤さんは人と接する時、まずは相手の立場に立ち、喜び・悲しみ・苦しみを我が事のように受け止めながら相和して生きる『同事』を実践し続けてこられたに違いありません。だからこそ

声を荒げることなく、いつもニコニコと和やかな顔と柔らかな口調で人と接することができるようだと思います。一朝一夕に佐藤さんのようになることはできないでしょう。けれども、『同事』の思いを心に持ち続けることはこの私にも、そしてあなたにも出来るはずです。『同事』の思いを心に持ち続け、やがて自然に行動に移せるよう、共に日々心がけてまいりましょう。

愛媛県 宗安寺 能仁洋一師
令和五年七月二十一日(三十二日)

◆ 心静かなれば 即ち身涼し

梅雨も明け、夏の雲が上空にぼつかりと浮かんでいます。暑い。朝の八時くらいにはもう、とにかく暑いですね。

私が住職をしているお寺の地域では、地藏盆といって七月か八月のどちらかに、地区ごとにお祀りされているお地藏さまに、僧侶が読経して回る行事があります。お祀りしているといつても、よくある道端の小さな御堂のことで、当然屋外での行事になります。一応は真昼を避けて、早朝か夕方にお参りしているのです

が、ご高齢の方の参列者の割合が多いので、読経中は少し遠くても、木陰から見守るようにお参りして頂くようお願いしています。私自身は坊主頭のまま、お堂の前で読経しているのですが、後になつて頭がクラクラするようになってきたので、今月からは網代傘を持参してお参りしようと思っています。

ところで、唐代の詩人、白居易が真夏の禅堂での修行を詠んだ詩の一節に「これ禅房に熱の到ることなきにあらず、ただよく心静かなれば即ち身も涼し」という、禅堂にも当然暑さが押し寄せてくるが、ただ心を静かに澄ませていると、そのまま身も涼しくなる。という、坐禅の心得としてもつかわれる言葉があります。坐禅をして、今この瞬間の一点に集中すれば暑さも忘れてしまえるのか。心の持ち方ひとつで何とかなることもありますが、暑いものは暑い。地球温暖化ならぬ地球沸騰の時代が到来したと、国連でも宣伝している昨今では無理は禁物。

坐禅というと、慣れないうちは足が痛いばかりで我慢をするものか、と思われている方も多いかもありませんが、宗門では冬暖夏涼をその術とせり云々、

と無理のない坐禅が提唱されていて、坐禅が続けているとそれが実感できます。無理をせず、出来るだけ適切な環境を整えてからそれぞれの立場で精進する、それが現代における心静かなれば即ち身涼しの境涯ではないでしょうか。

今年は暑さが特に厳しいようです、ご無理をされないようご自愛ください。

維那 吉松聖博
令和五年八月一日〜十日



■筆供養・弁天大祭

八月三日(木)(旧暦六月十七日)に毎年恒例の筆供養・弁天大祭が行われた。

当日午后より山門頭広場の筆塚前にて、三宅知殿導師のもと古筆の焼却供養が行われ、夕刻には、弁天堂にて、弁天大祭が行われ、楠本直録導師のもと諷経が厳修された。



筆供養

■大施食会

八月二日(水)、恒例の大施食会が山内大衆合山にて厳修された。

■夏安居解制

五月に入制以来、三ヶ月。首座を中心に、辯道精進を続けた夏安居は、八月七日(月)の楞嚴会満散・土地堂念誦、八日(火)の小参・人事行札等の諸行事を勤め、無事解制となった。



小 参



土地堂念誦

八月の日鑑

- | | |
|-----|----------|
| 一日 | 祝 禱 |
| 二日 | 大施食会 |
| 三日 | 筆供養・弁天大祭 |
| 六日 | 日曜参禅会 |
| 七日 | 楞嚴会満散 |
| | 土地堂念誦 |
| 八日 | 小参・人事行札 |
| 九日 | 住友展墓 |
| 十五日 | 祝 禱・略布薩 |
| 十六日 | 水施食 |
| 十八日 | 観音講・勉強会 |
| 廿一日 | 略布薩 |

九月の予定

- | | |
|-----|----------|
| 一日 | 祝 禱 |
| 三日 | 日曜参禅会 |
| 五日 | 参玄会(七日迄) |
| 十五日 | 祝 禱・略布薩 |
| 十八日 | 観音講・勉強会 |
| 廿一日 | 開山忌速夜 |
| 廿二日 | 開山忌正当 |
| 廿三日 | 寶篋印塔供養 |
| 廿八日 | 両祖忌速夜 |
| 廿九日 | 両祖忌正当 |
| 卅日 | 略布薩 |

銀杏感謝録

- | | |
|-----|---------|
| 鳥取県 | 吉祥院 殿 |
| 島根県 | 完全寺 殿 |
| 愛媛県 | 近藤正經 殿 |
| 埼玉県 | 永福寺 殿 |
| 静岡県 | 常雲寺 殿 |
| 愛媛県 | 手嶋富喜子 殿 |
| 鳥取県 | 入江純子 殿 |
| 北海道 | 瑞英寺 殿 |
| 栃木県 | 長泉寺 殿 |
| 岩手県 | 恩流寺 殿 |
| 広島県 | 無量寺 殿 |
| 島根県 | 禅床院 殿 |

(令和五年四月十五日受付迄)



鐘 声

私が入堂して、あと数日で半年が経ちます。正直、ここまで来るのに何度も立ち止まったり振り返ったりすることが多くありましたが、その度に「それでも」と自分に言い聞かせ続け、他の同安居からの励ましや、役寮様方の助言を受けここまで来る事が出来ました。この経験を生かして、次はどのような立場にある人の手助けになるように励んでいきたい。 鐘司 一道

